氏　　名	宮内　洋平
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	乙第３１８号
学位授与年月日	２０１６年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第２項該当
学 位 論 文 題 目	ポストアパルトヘイト南アフリカにおける都市統治の民営化と社会的分離 ――ヨハネスブルグのインナーシティ再生プロジェクトの事例から――
審 査 委 員	（主査）栗田　和明 川口　幸也 水上　徹男（立教大学大学院社会学研究科教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

序論

　第１節　本論文の目的

　第２節　調査地の概要

　第３節　本論文の構成

第１章　新自由主義的統治性と構造的不正義

　第１節　新自由主義と「社会的なもの」

　第２節　資本主義と生権力

　第３節　統治性の系譜学

　第４節　フォーディズムを統治性から読む

　第５節　構造的不正義と政治的責任

第２章　人種的フォーディズムから非人種的ポストフォーディズムへ

　第１節　南アフリカの「産業革命」とヨハネスブルグ

　第２節　アパルトヘイトと人種的フォーディズム

　第３節　ポストアパルトヘイトとポストフォーディズム型統治性

　第４節　グローバル時代の公共空間

第３章　「社会的なもの」の喪失と公共空間の抑圧

　第１節　ポストアパルトヘイトの雇用・格差・貧困

　第２節　サービス・デリバリーの政治学

　第３節　公共財の私有化

　第４節　ポストアパルトヘイト社会の治安

　第５節　貧しきものは罰せよ

　第６節　ポストアパルトヘイト社会の「客観的暴力」

第４章　安全コミュニティへの逃避

　第１節　不確実な時代のコミュニティ統治

　第２節　プライベート都市が築く「要塞」

　第３節　新自由主義的コミュニティが生みだす過剰包摂

第５章　インナーシティのプライベート都市化

　第１節　インナーシティの創造的破壊

　第２節　インナーシティのスーパーブロック化（1970～1990 年）

　第３節　インナーシティの放棄（1990～2000 年）

　第４節　都市改良地区化によるインナーシティ再生（2000 年～現在）

第６章　脱工業都市とクリエイティビティ

第１節　都市のグローバル競争
第２節　アート産業と新興黒人アーティスト
第３節　アートフェアとワールドクラス都市
第４節　ボヘミアンのノスタルジア——Yeoville 探訪——
第５節　クリエイティブ都市改良地区
第７章　「光の都市」から見る構造的不正義
第１節　「光の都市」の誕生
第２節　「光の都市」の開発状況
第３節　「光の都市」のジェントリフィケーション
第４節　闇に浮かぶ「光の都市」
第８章　「闇の都市」の窮状
第１節　「闇の都市」という常態
第２節　「闇の都市」のスラム
第３節　南アフリカのインフォーマル経済
第４節　「闇の都市」の経済活動
第５節　「報復都市」ヨハネスブルグ
第６節　「闇の都市」のアジール
第９章　プライベート都市が目指す社会的包摂
第１節　クリエイティブ・コミュニティから包摂的コミュニティへ
第２節　Maboneng と起業家精神
第３節　都市の公共空間をめぐって
第４節　ポストアパルトヘイトのアイデンティティ政治
第１０章　プライベート都市の社会工学
第１節　奇妙な Maboneng
第２節　都市改良地区というアーキテクチャ
第３節　「光の都市」のセキュリティ
第４節　「光の都市」の包摂的管理
結論　正義への責任のために
第１節　論点の整理
第２節　「救済の物語」が生みだす社会的分離
第３節　新自由主義的統治性が生みだす構造的不正義

（2）論文の内容要旨

本論文の問題関心は、ポストアパルトヘイト南アフリカで生まれている社会的分離の構造である。そこで、ヨハネスブルグのインナーシティ再生プロジェクトにともなう都市統治の民営化（プライベート都市化）に注目する。プライベート都市は他者を排除するものであると批判されてきた。ヨハネスブルグには、こうした批判を受けて、「社会的包摂」を掲げて貧困問題に取り組み始めたプライベート都市がある。私的主体が社会的なものに介入するという新しい包摂社会において生じた新たな社会的分離に注目する点が本論文の特徴である。

第１章では本論文の理論的枠組を整理する。まず新自由主義と社会的なものの関係を示し、フーコーの「生権力」と「統治性」の概念を整理してから、ナンシー・フレイザーによるフォーディズムからポストフォーディズムの統治性への移行の分析をまとめる。

第２章では第１章でみた理論的枠組が、現代南アフリカ社会を論じる上での有効性を主張する。アパルトヘイト体制下における「人種的フォーディズム体制」を踏まえた上で、ポストアパルトヘイト時代の「非人種的ポストフォーディズム体制」を統治性の概念から分析する。

第３章では現代南アフリカの社会問題をまとめる。暴力、治安の悪化、失業、格差、貧困、行政サービスの停滞、公共財の私有化、官憲による弱者の暴力的な取り締まりの実態を示し、アパルトヘイト時代から「社会的なもの」を十分に受け取ることができていなかった人びとが、現在も同じ立場に置かれ続けていることを示す。

第４章では、社会に不安が蔓延するなか、人びとは公共領域の代替物としてのコミュニティを希求している様子を見る。中間富裕層が安心感を得るために作り出しているコミュニティは、周囲にフェンスを張り巡らせた「ゲーテッド・コミュニティ」や、監視カメラや警備員によって管理された「都市改良地区」であり、「アフリカ化」してゆくヨハネスブルグのなかに例外空間を作り出し、資本投下と自己統治を行っていることを示す。

第５章では、長らく公共投資および民間投資が停止していたインナーシティに対する近年の投資回帰に注目する。1970 年代～1990 年のインナーシティ再編期、1990 年～2000 年の投資停止期の推移を概観し、2000 年から現在に至るインナーシティの復興はプライベート都市化によって実現されていることを示す。

第６章では、脱工業化社会における都市間競争に注目する。近年クリエイティブ・クラスによるクリエイティブ都市づくりが脚光を浴びているが、ヨハネスブルグもクリエイティブ産業を推進している。新たな黒人アーティストも台頭してきており、彼らはポストアパルトヘイト社会の苦悩を主題とする作品を

生み出しつつ、同時にそうした生を生きていることを示す。

第７章では、2009 年にヨハネスブルグのインナーシティの旧軽工業地区の再開発で生まれたプライベート都市である Maboneng に注目して、ヨハネスブルグの構造的不正義を明示する。一私企業の手による都市再生事業は、ヨハネスブルグの都市再生の成功モデルとして脚光を浴びているが、同時にこの再開発がジェントリフィケーションを引き起こしているとの批判を紹介する。

第８章では、Maboneng を取り囲むように存在する既存コミュニティに注目する。この街に暮らす人びとは南アフリカ人も含めて多くが移民であり、彼らの生は不確実性を帯びており、構造的不正義が招く負の要素を全て引き受けているように見受けられる。「闇の都市」はヨハネスブルグのインナーシティの常態であると考えられる。

第９章では、Maboneng プロジェクトが周辺の貧困コミュニティへの配慮を目指す「包摂的コミュニティ」づくりに移行していく様子を見る。プライベート都市を拠点に活動をする社会起業家、NGO/NPO 主宰者、アーティスト、建築家、市民の語りと実践を具体的に紹介している。

第１０章では、「包摂的コミュニティ」づくりが、人びとに得体も知れない違和感を引き起こしている様子をみる。この違和感を引き起こしているのは、都市改良地区による都市統治、厳格なセキュリティ、「人道主義」的な生への介入などからなるプライベート都市の本来的な構造によるものであると考える。

結論では、「救済の物語」を展開しているプライベート都市の生権力が社会的分離を生み出していること、ポストアパルトヘイトの新自由主義的統治性が新たな構造的不正義を引き起こしていることを指摘する。そして、構造的不正義の解消のために、この構造に関与する誰もが、政治的責任の一端を有すると結論づけている。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

本論文は 10 章と序論・終章からなり、全体で 430 ページにおよぶもので、申請者の足かけ 14 年にわたる南アフリカ滞在中のフィールドワークと関係文献の博捜の成果である。

南アフリカで実地調査をミクロの視点から実施した社会学や文化人類学の業績は僅少である。少なくとも都市部では類書がない。アパルトヘイトという特異な統治体系とその後の変遷は世界の耳目を集めたものであるが、研究業績の多くは文献収集か統計資料の分析によるもので、日本国内では法学、経済学分野に集中している。これは治安上の問題により、現地でフィールドワークを実施して多様な情報を収集することが困難であるからである。その中で申請者は南アフリカに長期間居住し、多分野での人脈と知見を広げてフィールドワークの実をあげた。

インフォーマントは本報告に反映させた者に限っても 80 人にのぼる。対象は行政担当者、プライベート空間の構築者だけでなく、アーティスト、新聞記者、プライベート空間を出入りする人びと、など多方面にわたる。現今の重層的な都市像を描こうとする真摯な努力を積み重ねた成果を結実させた論文になっている。本報告で示された情報だけでなく、今後も異なった視点から整理を加えて発表することで文化人類学会、都市社会学会などに貢献することが期待される。

申請者がしばしばとりあげる包摂と排除の原理はきわめて普遍的なものであり、世界の各地で観察することができる。これが非常に苛烈な様相で現出しているのが、アパルトヘイトとその後の都市と社会の変容を経た南アフリカである。南アフリカのヨハネスブルグを取り上げたことで、排除されている人びとがたんに収奪されているのではなく、存在の意味も認められない生を生きている状況にあることについて、リアリティをもって記述している。同時に、この原理は世界の各地で共通しており、より微温的ではあっても人びとが地理的に分断され、包摂と排除がすすんでいることが指摘されよう。先鋭的な事象を観察できるヨハネスブルグを素材にした論考は、典型例を示すと共に、他の都市への予見にも応用することができ、普遍性の高い成果を提供出来た。

都市での分断と抑圧を弥縫する手段としてアートが登場することは珍しいことではない。ヨハネスブルグでも同様な構造が見られるが、本論文ではたんに

匿名の画廊やアーティストの間の力学の記述ではなく、具体的に移住してきた個別のアーティストを描写することに成功している。この断章のみでもいわゆるアートワールド研究への貢献が大である。

本論文全体としては、理論的にはフーコーの生権力を援用し、生活する人びとの生命が脅かされ、さらには調教されたり無視されていく構造的な進行を描いている。国家にかわってプライベート都市が一定の社会的な責任を担うかのような言説もヨハネスブルグでは囁かれたが、それも結局はあらたな分断にすすんでいる様子を示している。

都市を論ずることは複層的な視点が必要であり、今後は本論文で詳述している南アフリカ政府、市政府、プライベート空間の開発業者、以外の多様な中間団体にも目配りすると、さらに包括的な論考になるものと期待される。